

## 会長この一年

東京大学大学院理学系研究科 太田俊明

21世紀初頭から始まった会長任期ももう直ぐ終わりになる。改めて、2001年、2002年初頭に自分が書いた挨拶文を読みなおして、決着がつかずまだ継続中の課題が山積しており、実行力の無さを悔いるところもあるが、ここではこの1年を振り返ってみよう。

2002年は昨年から継続して、将来計画特別委員会（上坪委員長）を設け、中間報告以後議論した様々な問題も含めて今期中に報告書をまとめる予定であった。しかし、懸案の軟X線真空紫外高輝度光源計画の動向が不透明なままでは、まとめる事が難しいこともあって、来期まで持ち越すことになった。できれば1月か2月中に報告書をまとめるべく努力する予定である。将来計画に関連しては、PFが共用開始から20年を越し、ほぼ同時に建設されたARも老朽化が進んでおり、これらの施設の更新計画を是非とも進めて行かなければならない。また、地方の計画も長い間持ち越されてきているのが現状である。放射光科学の今後の発展のためにこれらの日の目を見させる努力をすることも放射光学会の仕事であり、来期に引き継がなければならない。

会計の方は、今年度特に大きな事業計画がなかったこともあり、年会の企業展示のお陰で黒字が増えている。前期からの引継のとき、これまでの備蓄を切り崩さないよう厳しい申し送りがあったが、一応その約束を守ることができた。しかし、これらの黒字を如何に有効に学会活動に活用するかが問われている。これについては、会員みなさんのご意見をいただければ幸いである。

学会誌は今期から年6回発刊になった。編集委員会のご尽力により、発刊回数が増えることによる大きな出費が無く、このことも胸をなで下ろしている。今、世の中には多くの学会誌が氾濫しており、情報過多の状態といえるが、その中でこの学会誌「放射光」がさらに幅広い読者に愛読されるよう、来期の編集委員会にもお願いしたい。今年の放射光学会奨励賞は、関山 明氏（阪大基礎工・助手）に決まった。今回、応募者1名であり、敷居が高いと思われるのか、魅力が無いのか、奨励賞のあり方を再検討する必要があるだろう。魅力の無さに賞金の額が5万円という少額であることが考えられる。会計上多少余裕もできたことから、来期から20万円に値上げする事になった。是非とも多くの若手研究者がすばらしい成果を出し

て、奨励賞に応募して欲しい。

学会規則等検討委員会は10年前の菊田会長時代に設立されて、そのときのルールで今日まで運営されているが、いくつか問題が顕在化してきている。現在、評議員の任期が1期2年の後、2年の休眠期間を設けている。このシステムの導入によって、確かに限られた人に固定化しないで幅広い評議員が選出されるようになった。一方、2年の休眠によって評議員が入れ替わり、放射光学会の大事な問題がその時々の評議員の意見によって変わってしまうという、不連続性のデメリットが生じている。また、会長になる人がその前の期間に評議員でない確率は25%あり、継続的な学会活動を困難にしているという問題もある。改めてこのままで良いかどうか再検討する時期にきたように思われ、そのための特別委員会（雨宮慶幸委員長）を上げた。評議員の流動化と継続性を維持する方向を模索していくこと、これがこの特別委員会の一つの任務である。ただ、発足が遅かったために十分な審議をして報告を出すところまでには到っていない。これも、来期に引き継いでもらい、再来年の総会での判断を仰ぐようにできればと思う。

放射光施設を取り巻く環境は次第に変わりつつある。SPring-8は原則として旅費を支給しない方針となった。早晚、PFも旅費を出さない方向に移って行くであろう。つまり、旅費は科研費などユーザーが自分で払わなければならない。欧米では昔からそうなので、ある意味では世界的な基準になったとも言えるが、これまで旅費は施設が払ってくれるものと信じてきたユーザーにとっては一大事であり、果たしてちゃんとこのようなルールが定着するのかどうか多少の不安もある。しかし、今まさにユーザーの意識改革をするときでもあり、本当に放射光を必要とするユーザーがマシンタイムの心配をしないで質の高い研究ができるようになったとも言えよう。

ともあれ、放射光科学技術は年毎に進歩し、新しい光源の開発も盛んに行なわれている。これに対応するように放射光を利用した新しい科学の発展も大いに期待される。この2年間、不手際も数多くあったが、学会員の皆様のご協力によってなんとか任期を全うすることができた。今後の皆様の益々の発展を祈って、松下次期会長にバトンタッチする。